

---

# 君のために

田中智成

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のために

### 【Nコード】

N 6 4 1 1 A

### 【作者名】

田中智成

### 【あらすじ】

少年秋都あきとは相方である親友の冬馬ふゆまと一緒に闘いながら生きている。何のために生まれてきたのか、何のために生きているのかわからな  
いまま毎日を過ごしている秋都は真夏の夜に一人の女性と出会う。

## プロローグ（前書き）

一つの話として一応完結していますが、シリーズを考えているので、書き込まれていない部分もあります。

## プロローグ

濃紺の薄闇に浮かぶ月は細く、触れれば切れそうな刃物のように見えた。一人だということも忘れ、彼女は夜道で立ち止まり、空を見つめた。

普段よりも月が目を惹く夜だった。

ふと、なにやら気配を感じて彼女は振り返った。鼓動が早さを増す。

次の瞬間、黒い二つのシルエットが軽やかに彼女の頭上を越えていった。さらに家から家へと体重を感じさせない動きで飛び移っていく。

細い月を背に軽やかに動くさまを彼女は美しいと思った。

少しの間、その場に立ち尽くしていたが、思い出したように彼女は歩き出した。

「

」

公園に近づくと誰かの声が聞こえた。夏の夜に若者たちが浮かれて遊んでいるのだろう。彼女はそのくらいにしか思っていなかった。この公園は外灯も少なく、薄暗い。その上人もあまりこないことを思い出すと、さすがに心細くなった。足早に公園を通り過ぎようとした彼女は、その光景に足を止めた。

三つの黒い影が公園にあった。

大きな人影が一つ、中ぐらいの人影が一つ、もう一つの影は人ではなかった。シェパードのような体形の犬だった。

思わず足を止めた彼女は、次の瞬間息をのんだ。

中ぐらいの影が左腕を伸ばし、大きな影の首に手をかけた。手を掛けたと思う間に、大きな影は細くなり、地面に倒れた。それは砂で出来た人間のように崩れ去った。

彼女は咄嗟に手で口を覆った。声を上げそうになるのをなんとか

こらえた。

残りの人影が、彼女を見た。暗くて顔まではわからないが、そう確信した。

気づかれた。自分も砂のように消えてしまうのだろうか。

人影がゆつくりと近づく。近づいてくるうちに、自分よりも小さい人間だとわかった。

顔がわかるほどまで近づいて、それが十二、三歳の少年だと気づいた。小作りな顔は夜目にも白く、女の子のような綺麗な顔立ちをした少年だ。

「お姉さん、今の見た？」

少年は変声期を迎えていない少し高めの声で、彼女に話しかけてきた。

見られた、と秋都は思った。相手に気を取られすぎて、気づかなかったのだ。自分の失態に小さく舌打ちする。

消すか？

落ち着いた声がそう聞いた。その恐ろしい考えを秋都は軽く手を上げて制した。

「そんなことする必要はないよ」

そうは思っただけでも女がいつ悲鳴をあげるか気が気でなかった。秋都はゆっくりと女に近づく。女は驚いたような表情をし、口を手で覆ったまま固まっていた。完璧に見られた、と秋都は確信した。夜でも秋都の目には離れた女の姿がはっきりと見える。二十代後半の髪の短い、はっきりとした顔立ちの綺麗な女性だった。この暑さのなか首にスカーフを巻き、長袖のシャツを着ていた。

女からも顔が確認できる位置で立ち止まり、秋都は話しかけた。

「お姉さん、今の見た？」

聞くと、彼女は手を口から離し、こくんと一つ頷いた。

どうする

冬馬が聞いた。

どうするも何も決まっている。忘れてもらうしかない。

冬馬だけが聞こえる大ききさで秋都は答えた。さて、と彼女を見ると、秋都が驚くような行動にでた。

「わあ、シェパードかと思ったけど違うみたい。もっと毛がふさふさとしているのね。灰色の犬ってあまり見ないわ」

しゃがみ込んでこともあるのに、冬馬を撫でようと手を伸ばしたのである。秋都が止めようとするのも間に合わず、彼女は冬馬の首を撫でた。意外なことに当の冬馬は大人しく撫でられたままになっている。

どうしたんだよ、という秋都の呆れ声に冬馬はそっぽを向いた。

「私、犬飼っていたから扱いには慣れているの。この子、なんていうの？」

「……冬馬」

秋都はつい答えていた。冬馬か、と彼女は笑った。変わった人だと秋都は思った。あんな光景を見てどうして何もなかったかのよう

に振舞えるのだ。

「冬馬、格好いい名前ね。私は百合、よろしくね」

百合は冬馬の胸を軽く叩いた。その様子に秋都は何だか気が抜けてしまった。

「冬馬、行くよ」

秋都の呼び声に冬馬は百合から離れた。

いいのか、あれ

放っておいても大丈夫だろう、秋都はそう答えた。

「 待つて」

百合が呼び止める声に、秋都は足を止めた。

「私の家、すぐそこなの」

百合は公園から100メートルほど離れた15階建てのマンションを示した。

「よかったら夕飯を食べていかない？」

手にしたスーパールの袋には野菜や肉などの食材が入っていた。

百合は高橋百合という二十八歳の会社員だとわかった。防犯設備の整った新しいマンションから考えるとそれなりの収入がある女性だと思えた。三階の1LDKの部屋にはぬいぐるみがたくさん飾ってあり、かわいらしい雰囲気の一部屋が彼女の大人な印象とギャップがあった。

どうして着いて来てしまったんだろうと秋都は思う。断れることはできたはずだ。

「子どもの頃からカレーが好きだったんだけど、一人暮らしだとあまり作らないのよね。余しちゃうから」

テーブルの上にはカレーライスが二人分並べられていた。スパイスの効いたカレーの香りが食欲をそそる。百合は冬馬にも鳥のササミとキャベツの入ったおじやを作ってくれた。

「もしかしてカレーは嫌いだったかな」

スプーンも持たず、ただ座っている秋都に百合は軽く首を傾げた。

「……怖くないの？」

何が、と百合は微笑った。

「だってお姉さん、見たんでしょ？ おれが……」

尋常じゃない方法で人を殺したのを、という後に続く言葉を秋都は飲み込んだ。足元では冬馬が人の気も知らずにのんきに夕飯をがつついていた。

「びっくりしたわ。君、殺し屋さん？」

百合はさらりと恐ろしい問いを投げかけた。

「違うけど」

「理由があるんでしょう？ 出会う人みんなをああいいう目に合わせているわけじゃないのよね」

うん、と秋都は頷いた。

「なら怖くないわ。その歳で大きなものを背負っているのね」



言いながら、ボールに入ったサラダを秋都に取り分けてくれた。  
優しい声音に秋都は少し切なくなる。

「違うよ、そういうことじゃなくて。おれが人と違うのに怖くないの？ 化け物だって思わないの？」

感情的になっている自分に秋都は我ながら驚いていた。どうしてかこの人は自分を混乱させる。

「綺麗だと思ったの」

百合は笑顔で秋都と向き合っていた。それが上辺のものではないことがわかる。冬馬が大人しくしているのもわかる気がした。

穏やかで温かく、優しい雰囲気をもった女性だった。

「公園で会う前に、秋都くんたちは私の頭の上を飛んでいったのよ。気づいていた？」

目的の人物を追うのに精一杯で気づかなかった。冬馬も同じだろう。今度からは気を付けなければならない。

「今日の細い月と重なってね、すごく綺麗だった。それだけ」  
そして、百合はまた微笑った。

「お姉さん、変わってるね」

「よく言われるわ。さ、食べて。秋都くん何歳？」

「……十四」

「育ち盛りじゃない。たくさん食べなきゃだめよ。あ、飲み物がなかったわね。お茶でいい？それとも牛乳派？」

秋都に勧め、自分は慌しく台所へ向う。人の世話をやくのが好きな人らしい。百合の様子を見てみると自然と笑いがもれた。食べ終わった冬馬は横になってすっかりと寛いでいる。

「あら、楽しそうね」

グラスにお茶をつぐ百合もどこか楽しそうだった。

秋都は彼女の笑顔に癒されている自分に気づいていた。

なりゆきで夕飯をご馳走になったあと、秋都は百合の家を出た。冬馬が名残惜しそうに珍しく尻尾を振っていた。

「めずらしいね、冬馬が懐くなんて」

それは秋都も一緒

冬馬に言い返され、生意気な、と冬馬を睨む。確かに冬馬が言っていることも当たっていたが。

初対面だが、百合は居心地のよい空間を作り出してくれて、秋都も本当は家をでるのが名残惜しかった。

だが、もう係わり合いになることはないだろう。

マンションの静かな廊下に足音はない。気配を殺して行動する癖がついているからだ。

突き当たりにある階段で、三十近くの男とすれ違った。端正な顔立ちの男で、顎に伸ばした短いひげもよく似合っている。この男は歳を重ねるごとに格好よさが増していくタイプの人間だろう。

男とすれ違いざま、冬馬が僅かに表情を変えた。その違いは秋都にだけわかる微妙なものだったが。

「どうかした？」

冬馬の様子が気になり、秋都は男の姿を目で追った。男が立ち止まったところは紛れもなく、秋都たちが先ほど出てきたばかりの部屋だった。男がなれた様子で部屋に入るのまで見届けて、秋都たちは階段を下りた。

「彼女の恋人かな」

年齢を考えれば不思議はない。美男美女のお似合いのカップルというところだろう。

「なるほど、やきもちってこと」

相方を見ると、秋都のひやかしに付き合うつもりはないのか、ひ

たと正面を見据えて歩いていった。灰色のふさふさとした尾がバランスを取るように左右に揺れる。

マンシヨンを出て、秋都は空を見上げた。百合が言う、細い月を見ようと思ったからだ。

しかし、月は雲にその姿を隠されていた。

秋都は思わず自嘲めいた笑みを漏らす。

秋都

冬馬が秋都を呼んだ。緊張した様子が伝わる。

「わかつてる。行くよ」

秋都と冬馬は走り出した。全力をだした彼らに追いつけるものはない。

慌てたように黒スーツの男たちが三人暗がりから飛び出したが、すでに二人の姿を見失っていた。

自分はどうして生きているのだろう、秋都は思う。何のために生きているのだろう。

何のために生まれてきたのだろう。

数え切れないほど自問した問いだ。答えを秋都は見つけられない。

冬馬もそれには答えられないだろう。

「逃がしたか。すばしい奴らだ」

二人を追いかけて、公園まで来たところで男たちは足をとめた。

「マンシヨンの女は仲間か？」

さあ、ともう一人の男が答えた。

「聞いてみればわかる」

微笑った顔は、誰かを傷めたくてしかたがない、といった表情に見えた。

「関係ないよ」

ふいに聞こえた声に男たちは上を見上げた。ジャングルジムの天辺にいつの間にか少年が座って男たちを見下ろしていた。

少女のような顔立ちをした少年は静かな目で男たちを見ていた。

「ハルキも頭が悪いね、こんな使えない男ばかり送ってきたってどうしようもないのに」

「使えない、だと」

男たちの目に殺気が宿る。

「違う？　なら試してみようか」

秋都はジャングルジムから飛び降りると、男たちに近づいていった。男の一人がスーツの内側に手を入れた。しかし、男が武器を取り出すのより早く、秋都は地を蹴り、男の首に左腕を伸ばした。みるみるうちに男が干からびていく。男は腕を振り解こうと秋都の腕に爪を立てたが、なんの効果もなかった。

完全に動かなくなつた男を秋都は離れた。男はそのまま地面に倒れると、崩れた。

「わああっああ！」

叫びを發し、残つた二人のうちの一人が秋都に向つて銃を構えた。しかし、男はすぐに違和感に気づく。

銃もろとも肘から先が闇に消えていた。

灰色の獣が加えているのはたしてなんなのか。目の前の少年は自分に何をしようとしているのか。

思考がつながる前に、男の意識はなくなつた。その意識が再び戻ることは決してない。

最後の一人は仲間があっけなくやられる様をただ呆然と見ていた。綺麗な顔をした少年が死神に思えた。

「……化け物」

言葉でしか攻撃できない男に秋都は笑つた。

「否定はしないよ。それとお前は殺さない」

言つと秋都は男の目を覗いた。秋都の瞳が深みを増す。

「ハルキに伝えて。おれに構うな。これ以上付きまとうならすべてを壊してやるって」

男は虚ろな目で頷いた。そのまま、歩いて秋都たちの前から去つていった。

秋都はたった今できたばかりの二つの砂山に目をむけると、男とは反対の方向へ向って歩き出した。後ろから冬馬がついて来る。

大丈夫か

「何が？ 何もかわらないよ」

冬馬はそれ以上何も言わなかった。

化け物、男が言った言葉が耳に残る。自分が化け物だという自覚はあった。だからといって黙って狩られる筋合いはない。命を狙ってきた奴を返り討ちにしたらだけだ。

でも、と思う。

自分は化け物だが、男たちは違う。確かに人間だ。

自分は人を殺して生きている。

化け物の自分が。

そこまでして生きる意味はあるのだろうか。

「  
」

ぐるぐると頭の中を回る声に秋都は声にならない叫びを上げた。百合の笑顔がなぜかすでに懐かしいものとなっていた。

自分だって普通に生きたい。ああやって毎日誰かと笑って過ごしたい。

秋都にとってそれは小さくても叶うことのない望みだった。

足に柔らかいものがあたることに気づいた。歩きながら冬馬のしつぽが秋都の左足にぱたりぱたりと当たる。

一番の親友がちらりと秋都に視線を送った。普段と変わらない、どこか馬鹿にしたような目に秋都は微かに笑った。

そのまま、冬馬のしつぽがリズムミカルに左足にあたるのを感じながら、秋都は夜道を進んでいった。

やっぱり引き返そう。

そう思い振り返った秋都は、目的の人物が向こうからやってくる姿を目にし、その場から動くことができなくなってしまった。

「あら、秋都くん」

気づいた百合が、変わらない笑みを秋都に向けた。今日もスカーフを首に巻き、長袖のシャツを着ている。暑くないのだろうか。冬馬が自分にも気づいてくれといわんばかりに尻尾を振っていた。

「冬馬も。久しぶりね、元気だった？」

「まだ五日しか経ってないよ」

「でも五日も会わなかったのよ。どうしたの？」

「この町を出るから挨拶しようと思って。夕飯もごちそうになったし」

そうなの、と言った百合の表情は寂しげだった。

本当ならあの日、すぐに出るはずだったのだが決心がつかなかった。百合にまで危害が及ぶかもしれないとわかりつつ、もう一度この笑顔を見たかったのだ。

「お姉さんのカレーライスおいしかったです。……それじゃあ、お元気で」

「待って」

百合はあの夜と同じようにスーパーのビニール袋を持っていた。

「せっかくだから食べていって」

断るべきだと思いつつも結局秋都は断れなかった。うれしさを隠すように俯いて、ただ頷いた。

三階の部屋の鍵を開けると、百合は思い出したように手を止めた。「部屋が散らかっているのを忘れていたわ。ごめんね、ちょっと待

つていてくれる？　すぐに片付けるから」

「おれも手伝うよ」

申し出に百合は全く怖くない目で睨んだ。睨んでも目が笑っているのだから、子どもでも怖がらせることはできないだろう。

「秋都くんにとってはおばさんだけど、これでもレディーなのよ。見られたくないものもあるの」

「わかったよ。でも、おばさんじゃないよ」

ありがとう、と百合はドアの外に秋都たちを待たせて部屋に入った。

本当にこの町を出られるのか

足元に伏せた冬馬が訊く。

「出るよ。ずっといたら彼女にも迷惑をかけるかもしれない」

寂しいのは少しの間だ。すぐに百合を忘れる。百合もきつと秋都を忘れる。今までだってそうして町を転々としていたのだから。

ぴくりと冬馬が頭を上げた。百合の部屋のドアを見ている。どうしたと訊く前に冬馬は答えた。

秋都、血の匂いが

考えるよりも先に秋都はドアに手をかけた。まさか、あいつらが。嫌な予感に胸がざわつく。

部屋に入った秋都はその光景に呆然とした。床にはあの日飾られていたぬいぐるみたちが散らばり、中には破けて綿が出ている物もあった。観葉植物が叩き割られ、土がこぼれている。割れた食器も床に落ちていた。

秋都は破片も気にせず部屋に踏み込んだ。小さな痛みが足裏に走るが関係なかった。

「秋都くん……」

台所にいる百合が驚いたように秋都を見た。百合一人である。秋都は部屋を見渡したが、他に誰かがいる気配も感じられなかった。見ると、百合は手に包帯を巻いている最中だった。どうやら割れた食器を片付けているうちに手を怪我したらしい。それで流れた血

に冬馬が反応したのだ。

ほっとすると同時に秋都は部屋の様子の異常さに疑問を抱く。

「待っていてね、って言ったのに。しょうがないわね」

微笑った顔はいつもとは違い、力のない疲れきったものだった。

「どうしたの、この部屋」

「朝、ちよつとむしゃくしゃしていてね。大人もいろいろとたいへんなのよ」

包帯を巻き終わると百合は箒を握った。秋都はとつさにその腕を掴んだ。この部屋散らかしたのが百合だとは思えなかった。

困惑の表情で自分を見る百合の姿に秋都は一つの考えに行き着いた。真夏にも関わらず、長袖のシャツを着て、スカーフを巻いている百合。

「秋都くん、離して」

抗議の声を無視して、秋都は百合の袖をまくった。

細い腕に大きな青あざがあった。反対の腕も袖を捲ると同じようにあざができていた。この分だと隠れている部分にはほかにもあざが出来ている可能性が高い。

ならスカーフが隠しているものは？

秋都はそつとスカーフを外した。百合はもう何も言わなかった。

そこには明らかに男の手で首を絞められた痕があった。薄くはなっているが、はっきりと確認できる。

「誰にやられたんだ」

秋都の声はいつもより低い。問いながらも予想はついていた。あの日、彼女の部屋を訪れたあの男しくないない。

「あいつにやられたんだな」

百合は答えなかった。秋都は百合に背を向けた。

「秋都くん？」

普段とは違う様子の秋都に百合は不安げに呼びかけた。

「行ってくる」

「どこに行くっていうの」



「男のところだよ。お姉さんを傷つけた奴のところに」

居場所はわからない。でも冬馬がいる。一度会っている人間なら冬馬ならば居場所を突き止めることができる。幸いにして日もそう経っていない。

「違うのよ！」

百合が秋都の腕を掴んだ。

「階段で転んだのよ。ぼうつとしているからよく物にもぶつかるし」  
必死な百合の様子が痛々しく、秋都は泣きそうになった。

「私だってストレスもたまるし、何かに当たりたくなるときもあるのよ。それに」

「　　いいよ！　もうわかったよ」

秋都は言葉を遮った。これ以上百合の言葉を聞いていられなかった。

「どうしてそんな奴を庇うんだよ……」

「ごめんね、と百合はそれだけ呟いた。

その後、二人で二時間近くかけて部屋を片付けた。作業の間中、二人は何も喋らなかった。

「ごめんね、せっかく来てくれたのに」

ようやく片付いた部屋で、ソファアに座った百合は破れたぬいぐるみを縫っていた。ぽつりとした言葉に秋都はいいよ、としか言えなかった。百合に背を向け、ダイニングテーブルの椅子に座っていた。彼女の顔は見られなかった。見たら自分が泣いてしまいそうだったから。

「わかってるんだ、別れたほうがいいって。暴力を振られるたびにこんな男となんか、別れてやるって」

でも、と百合は続ける。

「それでも、好きなのよ。殴られても、蹴られても、一緒にいたいって思うほどに」

ばかだね、と付け足した言葉は百合の気持ちが表示されている気がして重たかった。自分でもわかってるのにどうしようもないのだ。「ほんと、馬鹿だやお姉さんは。そんなに綺麗なんだからいくらでもいい男つかまえられるのに」

秋都の言葉に百合はふふ、と微笑った。

「ありがとう。そっか、いくらでも捕まえられるかな、私」

「もちろん」

「来年三十になるけど？」

「お姉さんなら大丈夫だよ」

「よし、わかった」

気合を入れるように言うと、百合は秋都と冬馬をそばに呼んだ。

「私、趣味がぬいぐるみを作ることなの」

「もしかして、部屋のぬいぐるみって全部お姉さんが作ったの」

「9割方はね。いい年して恥ずかしいんだけど。印象に残った人とか物をぬいぐるみにしたりもしているのよ。はたからみたらちょっと気味が悪いかな」

少し恥ずかしそうに笑い、はい、と百合が見せたのは男の子と犬のぬいぐるみだった。

「これ、おれたち？」

「そう。私にとって秋都くんと冬馬に出会ったのはすごく印象的な出来事だったの。ちよつと破れちゃったけど、ちゃんと直したから。貰ってくれる？」

予想外の贈り物に秋都は感激して言葉がでなかった。人からプレゼントされるなんていつ以来だろうか。見ると、冬馬はちぎれんばかりにしつばを振り、百合の顔をなめていた。

気に食わないが、今はよしとしよう。秋都は親友の暴挙を笑って見ていた。

「渡せてよかった」

そう言って笑った顔はいつもの秋都が大好きな笑顔だった。

ぬいぐるみの男の子は柔らかい表情をしていた。似ているかどうかは別として、つくり手の優しい性格がよく現れていた。

ようくぬいぐるみを見ると、男の子も犬も白い花を身に付けている。

「お姉さん、これは？」

「気づかないかなあ。百合の花なの」

私の花なのよ、と百合は笑った。

「秋都くん、また遊びに来てね。もちろん冬馬も一緒に」

「うん。遊びにくるよ」

笑って答えたが、秋都はもう百合に会うことはないと思っていた。

「私もがんばるから。そうね、次会うときにはもつといい男を見つけているようにする」

それは自分自身に言い聞かせるような言葉だった。

秋都は百合があつた男を忘れることを願った。

二度と会うことはないけれど、遠くで、いつだって、ただ百合の  
幸せを祈っている。

翌日、百合は会社を休んだ。疲れがたまっていたのもあったし、秋都と話して気持ちがいくらかすつきりとして、気が抜けたせいもあるかもしれない。

まだ声の高い、少女のような少年を思い出し、百合は自然と心が穏やかになった。

不思議な少年だと思う。彼が人を殺しているのは確かに見たのに、怖いとは思えないのだ。優しい少年だと思う。大きなものを背負い込んでいるらしく、ときおり暗く沈んだ目をみせるが、彼と話していると心が穏やかになる。まっすぐに純粋な心を持っている子だ。ベッドの中でまどろんでいると、玄関を開ける音が耳に入った。

憲治、だろう。合鍵を持っているのは彼しかない。

百合はもともとベッドから下りた。ほんとばかな女だと思う。

昨日、秋都という間は絶対に別れようと、あんな男好きでもないと思っていたのに。嬉しさに胸を躍らせている自分がここにいた。

約束守れるのかしら。百合は思わず苦笑をもらした。

玄関へ出向くと憲治が驚いたような表情をした。普段、この時間は会社へ行っているのだから当然だ。

「いらっしやい」

「なんでいるんだよ」

笑顔で出迎えると不機嫌そうな声が返ってきた。

「ちよつと体調が悪くて、仕事を休んだの。でも、たいしたことはないのよ」

ぐっすりと眠ったせいで体調はよくなっていた。

「なんだよ、よりによって」

憲治がぼやく。

「ちよつとお、話がちがうじゃない」

憲治の背後から女の声が聞こえて、百合は身体を強張らせた。今のは自分の聞き間違いだろうか。

「ああ、悪い。今、部屋空けるから勘弁な」

「ならいいけど。早くしてよね」

聞き間違いなどではない。確かに今、百合は憲治の後ろにいる女の姿を見ている。

二十歳頃の若い女だ。長い茶髪に緩くパーマがかかった、短いデニムのスカートとキャミソール姿の女。ミニスカートから伸びた足はもちろんストッキングなど履いていない。急に今の自分のパジャマ姿が恥ずかしくなった。

女と目が合った。若いのに隙のない化粧をした大きな目が自分を馬鹿にしているように見えた。

百合は思わず憲治の腕を掴んだ。

「この子誰」

「あ？ お前に関係ないだろ」

「関係あるわよ。浮気だけはしない、っていったじゃない！」

憲治はめんどくさそうに片眉を上げた。

「浮気だけはしないって。していない、っていったでしょう？ だからどんなに殴られても、私だけを愛してくれているんだって、我慢していたのに」

暴力を振るったあと、憲治は必ず優しくかった。不器用なのに料理も作ってくれて、食べたいものも買ってきてくれた。

殴って御免な、と謝って、百合だけを愛していると何回言われたことか。その言葉を百合は信じていた。

「我慢していただって？」

憲治は低く笑った。次の瞬間、百合に憲治の平手が飛んで来た。衝撃に百合は玄関に倒れこむ。口中に錆びた味が広がった。

「我慢するくらいなら別れればいいだろ。俺はお前に付き合ってくれなんて頼んでいない」

目に涙がにじむのは痛みのせいなのか、悔しさのせいなのか。

「ねえ、あたし帰るよ。お取り込み中みたいだし」

女はそういうと憲治が止める間もなく、帰っていった。せつかくの予定が台無しになった憲治の苛立ちは百合に向けられた。

ドアの閉まる音がやけに静かに感じた。

「てめえのせいで、台無しだ！」

再び、平手が飛ぶ。

「……私がいるじゃない！ どうしてよ！ 百合だけを愛しているって何度も」

「私がいるって、ふざけんなよ。自分の姿をってみろよ！ 女の色気も何もないお前があいつの代わりになるわけないだろ！ もう、女として終わってんだよ」

憲治は百合を蹴る。一度蹴り出すと、止まらなくなったかのように蹴り続けた。百合はうずくまるだけで抵抗などできなかった。きつともうすぐ憲治もやめる。そしてまた優しく百合に触れるのだ。

「だいたい気持ち悪いんだよ。いい年こいて、ぬいぐるみなんて集めて。もういい。お前とはこれで終わりだ」

いつもと違う様子に百合は顔を上げた。涙と血で顔はぐちゃぐちゃになっていた。

背を向けた憲治の足を百合は掴んだ。みつともないとわかっていても、すがりつけずにはいられない。

「お願い、待って。私、変わるから。もっと」

百合の言葉を見無視して、憲治は腕を振り解くようにその顔を蹴った。そのままにも言わず部屋を出て行った。

百合はぼやけた視界で後ろ姿を見送ることしかできなかった。

雨が降り出したのは日も沈み、暗くなってからだった。秋都は決心がつかず、まだこの町に留まっていた。

行かないのか

「行くよ。でも」

ふんざりがつかないのはなぜだろう。百合にだって会った。思い残すことはもうないはずなのに。

大きな犬を共に秋都は傘をさして、歩いていた。どこに向っているのかは秋都にもわからない。冬馬は黙って付いて来るだけだった。

「……あれ」

道路を挟んだ反対側の道に見知った顔があった。でもどこで会ったのかはすぐに思い出せなかった。端整な顔立ちの男。教えてくれたのは冬馬だった。

百合の男だ

思い出したとたん怒りがわいた。そうだ、あいつだ。彼女を傷つけたあの男だ。

最初すれ違ったとき、微かに匂った

冬馬が言う。

血のにおいがした

「彼女の？」

あのときは誰のかはわからなかった。でも、今はあれが百合の血の匂いだったとわかる

秋都は反対側の道を歩いたまま、男をつけた。どうしても一言いわないと気がすまなかった。手を出すつもりはない。悔しいが百合はそれを望んでいないから。

秋都、今は強くあの男から血が匂う。百合の新しい血だ

「何だって？」



足を止めると、冬馬が秋都を見上げていた。その瞳が訴えている。言葉にしなくても秋都にはわかった。

「冬馬、彼女のところへ案内して！」

言うや否や冬馬は走り出した。秋都は傘を放りだしてその後続いた。

マンションの屋上だった。柵のそばにしゃがみこむ人影が一つあった。傘もささず、動かない。その人影が、柵の外にいるのだとわかり、秋都は息を呑む。

「お姉さん？」

秋都の呼び声に影はだるそうにこちらを向いた。夜目の利く秋都にはその顔がはっきりとわかった。怒りよりも何よりも涙が目には溢れた。

整った綺麗な顔は今はその面影もない。悪意もなしにここまでやれるものなのか。彼女を愛しているのなら、そもそも手を出さないはずだ。

秋都は百合に駆け寄った。苦しうにそれでも百合は秋都を見た。  
「秋都、くん。まだいたんだ」

かすれた声だった。雨音にさえ掻き消されてしまいそうなほど小さな声だった。

「あいつにやられたんだね」

「……うん。でも、今度こそ別れたから。振られちゃったの、私」

「早く病院に行こう」

柵を越えようとしたが、やんわりと拒絶させられた。

「いいのよ、もう」

どれくらいここにいたのか。百合の体はひどく濡れていた。

「何が、よくないよ」

「私ね、やっぱり憲治が好きなんだ」

「どうして、そんなひどいことまでされて、どうして」

「どうしてかな。でも、人を好きになるって言葉で簡単に、言い表

せること、出来ないと思うの」

百合は秋都から顔を背けた。

「わからない、けどそんなものよね」

雨音に混じり、百合の嗚咽が聞こえた。秋都にはかけてあげられる言葉が見つからなかった。こんなとき、自分は子どもだとつくづく思う。気の利いた言葉も、なにもできない。

「本当に好きだった。殴られて、蹴られて、殺されそうになったって、一緒にいたかった！ただ、一緒に同じ時間を過ごして、笑って、それだけでよかったの。多くなんて望んでなかった！ただ、それだけでよかったのに」

百合の言葉に秋都は胸が苦しかった。咽が詰まりそうに苦しい。彼女の願いは秋都と同じだ。彼女はそれを相手の男に望んでいた。どちらも同じく叶うことはない。

「どうしてこんなことになっちゃったんだろう。いつから変わっちゃったのかな。私がいけなかったのかな」

雨が降り続く。百合は息苦しそうに肩で息をしていた。お腹が痛いのか手で抑えている。

「お姉さん、病院へ行こう。風邪引いちゃうよ」

百合は答えなかった。秋都はいつでも動けるように態勢をととのえる。隣の冬馬からも緊張が伝わった。

「私、死ぬのかな。そんな気がする。ここで死んだら憲治が私を殺したことになるっちゃうよね」

百合の視線が下へ移動した。

「ねえ、秋都くん、ここから飛び降りたらわからないよね？私が死んでも憲治はつかまらないよね」

「馬鹿なこというなよ！どうしてそこまであの男をかばおうとするんだよ！お姉さん、今から病院に行こう？死なないよ、絶対に死んだりなんかしないから」

百合は微笑った。腫れた顔のせいでぎこちなかったが、それはまぎれもなくいつもと同じ穏やかなものだった。

「百合さん！ お願いだから、生きてよ。生きようとしてよ。おれを一人にしないで！」

秋都は柵を握り締めた。その手にそつと百合が触れた。冷たく、柔らかな手だった。

「初めて名前を呼んでくれたね、ありがとう」

「今、そっち行くから動かないでね」

百合は緩く首を振った。百合の顔から流れるものが涙なのか雨なのかわからなかった。そして、自分の頬を濡らすのは涙だろうか、雨だろうか。

「本当はこわいの。死にたくなんかない。私だって生きたい。幸せに生きたかった！」

「じゃあ、生きようよ！ あんな男のために死ぬなんてもつたいない。言っただろ、百合さんならもつといい男を捕まえられるって。

百合さんだってこれからなんだよ？ おれと違って百合さんには未来があるんだ！」

秋都の言葉が届かない。どうすることもできないのか。命を奪うことはできても、大切な人を守ることはできないのか。

「ほんと、馬鹿な女。でも、これが私の生き方だった。あの人を心から愛することができたことが、私の誇り」

百合は秋都に背を向ける。秋都は柵に足をかけた。

「でも、秋都くんに会えてよかった」

最後に見せた笑顔は雨に濡れ、大きく腫れた顔で、それでも今までで一番美しかった。

百合はそのまま飛び降りた。同時に秋都が柵を越えた。伸ばした手は虚しく空をつかんだ。

彼女を助けたかった。

自分が生まれた意味があるのなら、それは今ここで彼女を助けることにほかならない。

たとえ、自分の命と引き換えだとしても。



缶ビールの最後の一口を飲むと、憲治はいつものように彼女の名を呼んだ。

「百合、ビール」

言ってから、ここは自分の家で彼女はいないことを思い出した。

「くそっ」

握り締めた缶をゴミ箱に投げた。苛立ち紛れに投げた缶はゴミ箱を逸れ、床に落ちた。憲治はそれに更に苛立つ。

ようやくの思いで部屋に連れ込めそうだった女に逃げられ、おまけに百合はヒステリーを起こすし、と憲治にとってはさんざんな一日だった。

でも、と思う。あの女ともそろそろ潮時だと思っていたからちやうどよかった。

携帯電話の着信音がなり、憲治はめんどくさげに電話にでた。電話の相手は女だった。私、と言われても憲治には思い当たるふしがありすぎて名前を言えない。女が、彼女は？ と訊いたので、昼間逃げた女だと思った。憲治の態度が一転する。

「おう、昼間はごめんな。よかったよ、電話してくれて。え、怒ってない？」

よかったあ、と憲治は煙草をくわえた。電話の向こうで女は、今暇なのと告げた。

「そつなの？　じゃあ今からうち来いよ」

彼女は？

「昼間の女のこと？　ああ、あれは家政婦。ほんとだって。料理を作るしか能のない女」

でもけっこう長いつきあいだったよね。

「つきあいは長いけどな。別に彼女じゃねえし、ま、むこうは俺の

女だっと思っていたみたいだけど。ただの財布で家政婦だよ」

ひどい男だね。

「ばあか、こう見えても好きな女にはつくすんだぜ」

にやにやと憲治は笑う。火をつけようとしたまま煙草はそのままだ。

じゃあ、彼女は違ったの？

「疑うなら俺んちこいつて。どんだけ優しいか証拠見せてやるから」  
「もう来ているよ」

突如電話の声がすぐ側でも聞こえ、憲治は振り返る。そこには十二、三の少女が立っていた。いや、よく見れば少年だとわかった。足元には灰色の毛並みをした犬がいる。

「なんだ、てめえは」

すぐんで見せるも憲治は驚きを隠せない。玄関は鍵がかかっている。ベランダの戸は開いているが、ここは5階だ。どこからこの少年は入ってきたというのだ。

「おれはさ、別に構わないんだ」

憲治の問いに答えず少年はそう言った。

「あんたが死のうと。あんたを殺そうと」

「は？ 俺を殺すって、馬鹿かお前」

どうみても目の前の少年は非力そうに見える。問題は大きな犬だが、それすらもなんとかなるだろう。相手が行動を起こしても平気だという思いが憲治にあった。そばにある消臭スプレーを気づかれないように握った。

「むしろ彼女のためにはそのほうがいいと思っている」

少年の「彼女」という言葉に憲治はぴんときた。

「お前、百合に頼まれたのか？ 俺を殺すように」

「彼女はそんなこと頼まないよ」

「そうだろうな。で、あの女はどうなった。まさか死んだか？」

「もし、そうだったら？」

憲治は口笛を吹いた。

「見直すよ。あいつのことだから俺に迷惑をかけないように死んでくれたんだろうな。あいつはそういう女だからな。まったく馬鹿な女だ」

「死んだよ」

少年はそう告げた。冷たい目が憲治に向けられていた。自分より一回り以上も年下の子どもの目に憲治は怯んだ。知らずに一歩、後ずさっていた。なんなんだ、こいつは。

「それで？ 俺に復讐か、お前が。何の力もないお前が俺を殺せるのか」

「もし、あんたが少しでも彼女を想っていたなら考え直すつもりだった。でもあんた、おれが思ったとおりの最低な男だったよ」

少年がゆつくりと近づいて来た。犬は動こうとしない。ということはこの少年が自分に挑んできているというわけだ。しょせん子どもだ、憲治は鼻で笑った。

「がきが生意気いうんじゃねえ！」

憲治は消臭スプレーを少年の目をめがけて拭きつけた。これでこいつはもうどうにでもなる。あとは犬だけだ。

勝利を予感したが、少年は彼の前から消えていた。状況が飲み込めず、少年を探そうとする前に誰かが右腕を掴んだ。

「ひっ」

短く情けない悲鳴が口から漏れた。右腕をつかんでいるのは目を潰したと思った少年だった。その様子からはスプレーがかかったとは思えなかった。

信じられないほどの力で少年は憲治の腕を掴んだ。

「おれ、あんたのこと殺したいくらい憎んでるよ」

少年の目に憲治は怯えた。この目は本気で自分を殺そうとしている。

「でも、彼女はそれを望んでいない。生きたいという思いよりもあんたへの想いが強かったんだ」

憲治はすでに恐怖に支配されていた。少年は強者であり、自分は

弱者なのだ、憲治は悟った。

「おれが怖い？ でも、彼女はもっと怖かったし、苦しかったんだ！」

少年の瞳が深みを増した。憲治の意識はその瞳に飲まれるように遠のいていった。

秋都は足元に転がる男を冷めた目で見つめていた。

「あんたは殺さないよ。それが彼女の望みだからね。でも、もう二度とあんたは元に戻れない。あんたには光は永遠にない」

意識のない男に伝えると、秋都はベランダに向った。傍観していた冬馬は男を一瞥すると秋都に続いた。

「一つ言っておくよ。高橋百合は死んだ。もう、あんたを心から愛してくれた女性はいない」

ここにこれ以上、用はない。秋都は五階のベランダから飛び降りた。

秋都の罪はまた一つ増えた。

それでもよかった。秋都は後悔などしていない。

雨がすべてを洗い流すかのように降り続いていった。



## エピローグ

看護師の腕を掴みながら男が歩いていった。足取りはゆっくりでおぼつかない。左手は看護師の腕に、右手は杖を手にしていた。

何かの拍子か男の手から杖が離れた。消えた右手の感触に男の足が止まる。ひざについて杖を捜した。

「どうぞ」

女が杖を拾い、男に差し出した。それにもかかわらず、男は杖を探し続ける。その様子に目と耳が不自由なのだと気づき、女は男の肩を軽く叩いてから立ち上がらせた。その手に杖を握らせる。戻った感触に男は戸惑いながらも頭を下げた。

「高橋さん」

自分と呼ぶ声に女は振り返った。お世話になった看護師が呼びに来てくれたのだ。

「お母様がお迎えにいらっしやっていますよ」

「わかりました」

答えて、彼女は視線を先ほどの男に送る。

「お知り合いですか」

「いえ、違います。ただ、ちょっと気になったので」

看護師は彼女の視線の先を見て、得心したように「ああ」と声を漏らした。

「あの方は目が見えないんですよ。耳も聞こえなくて、声を出すこともできないらしいんです。それも後天的だとかで。昨日から検査でいらっしやっているんです」

話してから若い看護師はばつの悪そうな表情を作った。

「少し話すぎましたね。内緒、ということをお願いします」

はい、と彼女は微笑った。そして、看護師の腕に目を留める。

「そっいえば、どうしたんですか？」

二本の白い百合の花が看護師の腕に抱えられていた。

「これ、高橋さんにですよ。退院祝いみたいです」

看護師は花束を渡した。

「かわいい男の子が持ってきたんですよ。……覚えていますか？」

良い香りがふわりと鼻腔をくすぐった。温かい気持ちが胸に入り込んできた。

「いいえ。でも、なんだかぼんやりと思い出すことがあります。落ちてゆく私の手を握った暖かくて小さな手を」

看護師は笑った。

「高橋さんどこからも落ちていないのに、不思議ですね」

そうですね、と彼女は少し照れた風だった。

「百合」

母親の声だとわかった。最初は違和感のあった女性も、今は自分の母親だとわかるようになった。忘れたことはあまりにも大きくて、これからの人生は楽じゃないことも多いだろうが、それでも彼女は今とても希望にあふれていた。

ここからまた始まるのだと。

「高橋さん、退院おめでとうございます」

看護師が笑って出送ってくれた。

「ありがとうございます」

彼女は笑った。明るく、穏やかで優しい笑顔だった。

もういいのか

「いいよ。久しぶりに戻ってきたけど、もうここには用はないから」  
秋都の足取りは軽やかだった。

彼女はもう大丈夫だろう、そう思える。きっとこれから素敵な人が現れて、幸せな人生を送るのだ。そうでなければならぬ。あの人には笑顔が似合うのだから。

恋と呼ぶにはあまりにも幼い。それでも秋都は百合のことを好き

だった。

それこそ命を投げ捨てても助けたいと思うほどに。  
秋都の望みはきつと叶わない。

問いに対する答えも見つからないままだ。自分はなんのために生きているのか。なんのために生まれたのか。

だが、それも今はどうでもいい。

吹く風が秋の訪れを感じさせた。今の秋都にはその少し涼しげな風を楽しむ余裕がある。

「花にはね、花言葉ってあるんだ。知っていた？」  
知らない

「百合の花言葉は『清纯』。彼女にぴったりだね。百合さんはすごく綺麗な人だった。心もすべて」  
そうだな

冬馬が笑ったように見えて秋都は思わず笑った。  
どうした

「なんでもないよ」

秋都は答えると冬馬の胸を軽く叩き、走り出した。

## エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。シリーズを考えているので、次の話もよろしく願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6411a/>

---

君のために

2010年10月8日15時49分発行